



第6回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見



第6回食の新潟国際賞受賞者の発表と記者会見が7月31日(金)新潟市役所において多くの取材陣が出席する中行われました。

記者会見には大賞受賞者の村上優氏、佐野藤三郎特別賞受賞者の大坪研一氏、地域未来賞の江川和徳氏の3名が出席され受賞の喜びと今後の抱負などについて語りました。なお、21世紀希望賞受賞の矢野裕之氏(国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構)は書面にて受賞の喜びをお伝えしました。

以下、記者会見でのご挨拶及び受賞者のコメントをお伝えします。

- | | | | | |
|----------------|----------|----------|------|-------|
| 1. 主催者挨拶・受賞者発表 | 財団理事長 | 池田 弘 | | |
| 2. ご挨拶 | 新潟市長 | 中原八一 氏 | | |
| 3. 選考経過・受賞理由説明 | 選考委員長 | 唐木英明 氏 | | |
| 4. 受賞者コメント | 大 賞 | ペシャワール会 | 会長 | 村上 優氏 |
| | 佐野藤三郎特別賞 | 新潟薬科大学 | 特任教授 | 大坪研一氏 |
| | 地域未来賞 | 江川技術士事務所 | 所長 | 江川和徳氏 |

中原八一新潟市長のご挨拶

「第6回食の新潟国際賞」の受賞者発表にあたり新潟市民を代表して一言お祝いの言葉を申し上げます。

本日受賞されました、ペシャワール会を代表して会長村上優様、大坪研一様、江川和徳様、矢野裕之様におかれましては、心からお祝い申し上げます。

受賞された皆さまは、食分野において永年たゆまぬ情熱と研鑽を積み、世界が直面する貧困や飢餓、食料生産・供給など世界の食の課題の解決や研究に携わってこられました。

この取り組みは、食分野で世界に貢献する方々に光を当て顕彰する「佐野藤三郎記念・食の新潟国際賞」の創設理念にふさわしい顕著な業績です。

受賞者の皆さまには、この受賞を機にさらに大きな飛躍とご活躍をされますことを心からご祈念申し上げます。

また、食の新潟国際賞財団におかれましては、この国際賞の開催で培われた国際的なネットワークを活用し、引き続き本市の食と農業の発展に向けて重要な役割を果たされまるとともに、未来に向かって「全国とつながる」「世界とつながる」拠点都市・新潟の構築に向けて共に歩みを進めていただきますことを期待しております。

最後にあらためて受賞された皆さまに心からお祝い申し上げます。ご挨拶といたします。

第6回受賞者が中原新潟市長と面談

第6回食の新潟国際賞受賞者発表記者会見に先立ち、大賞受賞者の村上優氏、佐野藤三郎特別賞受賞者の大坪研一氏、地域未来賞の江川和徳氏の3名が新潟市役所を訪問し中原新潟市長を訪問しました。

面談には池田弘財団理事長と選考委員長である財団評議員の唐木英明氏も同席し、中原新潟市長からは受賞のお祝いの言葉があり、受賞者からはそれぞれ受賞の喜びと感謝の言葉があり、和やかな懇談となりました。



第6回食の新潟国際賞 受賞者発表記者会見 受賞者コメント



ペシャワール会 会長 村上 優 氏
記者会見 コメント

栄えある食の新潟国際賞大賞を授与いただきまして本当にありがとうございます。選考いただきました理事長の池田様、副理事長の中原様、そして今丁寧にご紹介頂きました選考委員長の唐木様本当にありがとうございます。先週中村哲医師の奥様の尚子さんのところに、この賞の受賞をご報告に参りました。大変喜んでおられました。中村哲医師というのは医者なのです。それがなぜ土木の工事をし、そして農業のことについて関与していったのか。「素人がそういうことをしている」とずっと言われ続けていましたが、専門家として認めていただいたということに大変喜びを表現しておられました。

中村哲医師というのは1983年にパキスタンのペシャワールでハンセン病の治療をするため派遣をされたのが始まりです。その頃アフガニスタンで戦争が起って難民が300万人国境沿いにいて、否が応にもその難民の医療に携わらざるを得なくなっていったのが次の展開でした。そしてJAMS(日本・アフガン医療サービス)という団体、PMSという団体を作りながら医療を展開して行き、患者が一番多かったアフガニスタンの国境沿いにある山岳地域に、拠点を作って医療を始めようというところから、アフガニスタンの国内の中に入ることになりました。

医療は医療として地道に進んで行きましたが、なぜこれが用水路になり、そして食料になったのかというと、2000年にそれまで我々の会というのは貧困であるとか、それから戦争ないしは平和という課題を背負って活動していったのですが、その年に大干ばつが起って、そのために更に難民が出ていくということで、非常に多くの難民が戦争だけではなく、飢餓難民として国外に出ていく。そこをなんとか食い止めようというところが井戸と用水路の開発の始まりになったわけです。井戸が2000年、用水路が2003年のことでした。

それから20年間、用水路にかかりきりのような状態で、医者はもうほぼ機能停止にして土木技術者みたいなことをしてまいりました。今では農業土木学会(現:農業農村工学会)でも賞をもらいましたし、農業土木の中ではそれなりの専門家として認知されるようになりましたけれども、結局はその水をなぜやるかというのは食を得ること、食べるものを得ること、そして難民にならずに自分の土地で家族一緒に住んで、それが平和の礎になるんだということが彼の考えでした。

今ではクナル河という流域に1万6,500ヘクタール、65万人がそこで飢えずに生活ができる地帯ができました。その方式は、実は日本の古い農業土木技術をアフガニスタンに適用してきました。古いと言っても江戸時代の技術を向こうに根付かせていくというスタイルでした。それをPMS方式、PMSというのはPeace(Japan) Medical Serviceというのが正式なので、日本語では「平和医療団・日本」と訳しています。そのPMS方式という方式が広がり、2年前にはそのことを大統領が知るようになって、アフガニスタン全体でこのPMS方式で灌漑をしていこうというのが決まって、その事業が今拡大しております。昨年、中村先生は亡くなられましたけれども、それを引き継いで中村哲の事業を引き継ぎ、中村哲の夢を引き継ぐんだということを合言葉に今事業の展開を行っております。

今クナル河に沿って2つの工事が予定されていて、その一つのバルカシコートという部分、大きい用水路のあるもう一つ上流の部分に用水路を作っていくということで、工事をこの秋から着工するんですけれども、今回いただきました大賞はこの工事の一部に使わせていただくということで、今内部では話をしております。

本当にこういう事業が末永く続いていくことは、非常に狭い地域での活動でしたけれど、広くそれがアフガニスタンのそして世界の平和につながることを彼も祈っているとそういう風に思っております。

—— 今後の抱負について

ペシャワール会としては「中村哲医師の事業は継続し、中村哲医師の夢は引き継ぐ」というのが合言葉になっております。今PMS方式という形でアフガニスタンの干ばつに対応しようというこの事業をこれからも続けていきたい。その手始めとして今年新たに2つの用水路の建設の準備をしております。一つはかなり大規模なもので設計に事前調査がかかるので、それは今年中に作って来年着工ということになっております。もう一つのバルカシコートというのは小規模なので、それはこの秋から工事を始める準備をしております。これはクナル河周辺で起っていることで、このクナル河だけではなく、カブール河というもっと大きな河があるので、その他の地域も含めて中村哲医師が開発してきて地元根付かせていったPMS方式をこの国の中でも広げていきたいです。

これは実は我々の会だけで出来ることではなくて、JICAであるとか、食の新潟国際賞でも関係しておりますFAOも含めて、アフガニスタンの国も含めて事業を進めて参りたいと思っております。

向こう20年継続するような事業にせよということが、彼のここ3年の我々への指示でしたので、この事業を20年しっかり継続出来るような体制を整えて進めて参りたいと思っております。

第6回食の新潟国際賞 受賞者発表記者会見 受賞者コメント

大坪 研一 氏
記者会見 コメント



この度は栄えある食の新潟国際賞、佐野藤三郎特別賞をいただきまして心より御礼を申し上げます。食の新潟国際賞財団の池田理事長様、中原副理事長様、また選考委員長の唐木先生、そして推薦をいただきました新潟大学及び日本応用糖質科学会、そして共同研究者の皆様にご心より御礼を申し上げます。

この佐野藤三郎というお名前のついた賞をいただくことで本当に心より嬉しく存じます。食の新潟国際賞財団の訪中団に3回参加いたしまして、芦沼を美田に変えられ、そして1970年代に広大な中国の黒龍江省の三江平原で土地改良をされた佐野藤三郎先生のお名前の冠とする賞をいただきましたことを、本当に嬉しく心より感謝を申し上げます。

研究業績につきましては簡単に申し上げますが、お米をずっと研究してまいりまして、おいしさですとか、DNAの品質評価、米の機能性の開発に携わって参りました。

また国際協力としてはフィリピンにあります国際稲研究所(IRRI)との共同研究や、米国農業調査局(ARS)・米国農務省(USDA)との共同研究、あるいは中国黒龍江省農業科学院との共同研究、タイとの共同研究などを行って参りました。その間JICAや国連大を通じましてベトナム、フィリピン、中国、インドなどから研修生を迎えまして、教育を同時に勤めて参りました。新潟に参りましてから米の食味などの研究を続けるとともに、新潟市の食文化創造都市推進会議にも参加させていただきました。

こうしたことは中村准教授をはじめとする多くの共同研究者と共にやってきたことをごさいます、この場を借りて深く御礼を申し上げます。この度は誠にありがとうございました。

——「今後の抱負について」

今回の受賞を励みといたしまして、現在行っております糖尿病・認知症複合予防機能のある米飯の開発といった米の新規需要の研究を続けるとともに、佐野藤三郎先生には遠く及びせんけれども、先生のご業績を遠く仰ぎ見ながら国際協力に勤めて参りたいと思います。大学人としては学生への協力、また農水省や新潟における米の品質向上や消費拡大など微力を尽くして参りたいと思います。

具体的の一つは農水省さんの支援を受けまして、昨年メディカルライス協会というものを設立して副理事長を務めさせていただいております。そして米による健康機能、特に江川先生からお話ありましたように玄米を中心とした、色々な硬質米ですとか、有色素米とかを健康機能に活かしていきたいです。

それともう一つは今新型コロナで今年はどうなるかわかりませんが、昨年一昨年に中国の黒龍江省国際米フェスティバルというのが始まりまして、私は外国人の方の審査員長を務めさせていただいております。昨年一昨年とも地元の中国黒龍江省の五常米と新潟県のコシヒカリが金賞を受賞しております。こういった形で国際交流の中でまた新潟の米で交流を図っていきたい。この2点を追加で申し上げます。

第6回食の新潟国際賞 受賞者発表記者会見 受賞者コメント

江川 和徳 氏
記者会見 コメント



栄えある食の新潟国際賞の今年から新設の地域未来賞を受賞させていただきまして感慨無量になっている状態でございます。また選考に携わられました皆様に熱く御礼を申し上げます。また、「私で良かったのかな」というような申し訳なさも心の中に湧いているような状態です。地域未来賞ということで昔を振り返るということではなくて、これから向かって行きたいなというところを少し、この賞を励みにして思っているところを述べさせていただこうかなと思っております。

私は、元々は米の加工が専門でございますが、私の恩師で斎藤昭三という新潟の米産業の技術的支柱となって産業発展をされた大先生がおられます。その大先生が21世紀の新潟のあるべき姿という方向を意向の中に記されておりまして、その中にアグロインダストリーという構想があります。そこに少しでもお役に立てればというような形ですと進んで来たわけですが、そこはアグロインダストリーと言うように、農工連携が新潟のあるべき方向だと示されております。

私は一体どうやって農工連携を図って行こうかと考えた時に、やっぱりこれからは健康長寿の時代ですから、新潟が全国よりも突出して死亡率が高いのが脳血管障害と胃がんということで、そこにお役に立てるような農工連携の製品ができないかと色々考えますと、玄米ががんにも効くという話があります。それからメタボにも非常に効果的なので、それで玄米をベースにしました。

それから脳血管障害は循環器系がスムーズに動いてくれれば良いということで、この血行改善に役立つ技術、これは新潟の十八番の発酵という中で話すと、酢酸発酵が非常に血行改善に役立つので、玄米を酢酸発酵して、そして新潟から脳血管障害とか胃がんを無くしていけるような方向の食品開発が出来れば良いなということで、今飲める玄米ジュースみたい形で進めております。

こんな所をベースにしながら農業改良協会があった時に生活改良普及委員の皆様が全県下を回って新潟県の郷土食を発掘して「新潟の郷土食」という本にまとめられております。「こんな食があったの」というような感じで県内の皆様も驚いておられる方が多いので、その辺あたりに健康に役立つ農産物を利用して、県内の郷土食を健康に役立つ方向で再復活をしていくことができれば、前回佐野藤三郎特別賞を受賞されてユネスコの無形文化遺産に大貢献されました村田吉弘氏ですとか、それから食の栄養で非常に貢献のありました機能性食品の産みの親とも言われる前回大賞を受賞されました荒井綜一氏ですとか、米の評価の専門の大坪研一氏ですとか、この賞を受賞された色々な先生方を結集した新しい郷土食として蘇らせることが出来れば、全国からインバウンドで呼べるような食の形成が出来るのではないかとこのを夢見ながら、寿命が持つかどうか分からないのですが、取り組んで行きたいなというように思っている所です。今日は本当にありがとうございました。

—— 今後の抱負について

私の方は年齢的には功労賞という感じかもしれませんが、いただいたのは「未来賞」ですのでこれは奨励賞だという風に自分に言い聞かせまして、なんとか玄米を通じてもう一度農業を活性化して、食品産業を元気にという方向の取り組みを進めていきたいというのが、今思っている抱負でございます。

企画経営委員会が設置される

令和2年度から財団の安定的な運営と積極的な事業活動を展開するために財団内に企画運営委員会を設置し、事業の企画や財団運営などについて理事会への提言・報告を行うとともに財団活動のサポートを行うことになりました。

第1回委員会が9月8日に開催され、委員長に大坪研一氏（新潟薬科大学 応用生命科学部 特任教授、財団理事）が就任しました。

第1回会議は財団の会員組織概要、令和2年度の事業計画、財団事業運営における検討事項、第6回食の新潟国際賞表彰事業について報告と意見交換を行いました。10月の第2回会議から本格的に財団事業や運営などについてテーマをごとに協議する予定です。

企画運営委員名簿

(順不同)

	氏名	所属・職名
委員長	大坪 研一	新潟薬科大学 応用生命科学部 特任教授
委員	田中通泰 高橋 肇	亀田製菓(株) 代表取締役会長CEO 亀田製菓(株) お米研究所 所長
委員	浅野 和男	(株)ブルボン 常務取締役 執行役員
委員	高島 正樹	一正蒲鉾(株) 取締役 経営企画部長
委員	西海 理之	新潟大学 自然科学系 教授
委員	鶴間 尚	新潟日报社 総合プロデュース室 室長
委員	遠藤 二郎	亀田郷土地改良区 事務局長
委員	武本 俊彦	新潟食料農業大学 食料産業学科 教授
委員	鈴木 伸作	(公財)食の新潟国際賞財団 常務理事
オブザーバー	高野 好弘	(学)国際総合学園 役員室長
事務局	駒形 正明	(公財)食の新潟国際賞財団 事務局長

財団主催オンラインセミナー開催のご案内

「新型コロナは恐怖の感染症ではない」

～情報が作り出した大きな混乱～

食の新潟国際賞財団では会員の皆様への情報提供の場として、これまで当財団が培ってきたネットワークを生かし、各分野でご活躍されている皆様に講師としてお迎えし、Webでのオンラインセミナーを連続開催いたします。ご期待ください。

■ 日時: 令和2年10月13日(火)
14:00～15:00

■ 開催方式: ZOOMミーティング

■ 参加費: 無料

■ 定員: 50名(先着順)



講師
唐木 英明 氏

公益財団法人 食の安全・安心財団 理事長
東京大学 名誉教授
食の新潟国際賞 選考委員長
公益財団法人 食の新潟国際賞財団 評議員

1964年東京大学農学部獣医学科卒業。同大助手、助教授、テキサス大学ダラス医学研究所研究員を経て東京大学教授、同大アイソトープ総合センター長を併任、2003年に名誉教授。専門は薬理学、毒性学(化学物質の人体への作用)、食品安全、リスクマネジメント。

(詳細はチラシまたは財団ホームページをご覧ください)

● 特別会員

亀田製菓(株)	(株)ブルボン	(学)新潟総合学園
一正蒲鉾(株)	サトウ食品(株)	新潟県農業協同組合中央会
(株)第四銀行	(株)栗山米菓	亀田郷土地改良区
(株)新潟日報社	(株)新宣	(株)エイケイ
亀田商工会議所	(株)新潟クボタ	NST新潟総合テレビ
にいがた22の会	(株)日本食糧新聞社	ホテル日航新潟
五十嵐建設工業(株)		

● 正会員

新潟市農業協同組合	月島食品工業(株)	セツツカートン(株)新潟工場
新潟県信用組合	日本製粉(株)関東支店	東邦産業(株)
(株)第一印刷所	日本甜菜製糖(株)	麒麟山酒造(株)
(株)本間組	(株)鳥梅	(株)加島屋
石本酒造(株)	新潟工科大学産学交流会	(株)日本フードリンク
(株)ミカサ	(株)キタック	(株)アド・メディック
神山物産(株)	北越工業(株)	UX新潟テレビ21
ハセガワ化成工業(株)	丸榮製粉(株)	イカリ消毒(株)
藤屋段ボール(株)	新潟万代島総合企画(株)	新潟工科大学
(株)タケショー	鍋林(株)ヘルスフーズ事業部	(株)日本旅行新潟支店
(株)新潟博報堂	TeNYテレビ新潟放送網	(株)田中組
BSN新潟放送	(株)栗田工務店	(医)愛仁会 亀田第一病院
新潟陸運(株)	三和薬品(株)	(株)ひらせいホームセンター
(株)新潟食品運輸	松田産業(株)	

● 個人会員

藤島 安之	和田 充彦	井田 増夫	古泉 肇	高畑 昭文	廣瀬 利雄	山口 勉	木村 真教
君塚 毅	宗像 寛明	高橋 常考	田村 敏郎	杉本 克己	近藤 鴻	佐藤 珠美	大坪 守
大川 秀雄	大倉 正寿	吉岡 謙一	古口 日出男	坂田 武利	門脇 基二	佐藤 久栄	大谷 勝男
田中 敏明	青木 清	阿部 徳威	佐藤 勉	佐藤 清一	野上 文彰	板井 茂	浅井 善広
佐野 正人	田中 作一	新保 房機	古泉 榮三	今泉 昇	佐藤 純	倉嶋 則昭	塚本 太一
大越 斎	野口 正晴	酒井 定勝	加藤 洋介	長谷川 宏志	齋藤 秀明	松本 裕志	當野 篤
高山 利夫	久保田 紳一	河瀬 三千夫	和澄 孝男	五十嵐 修	望月 健三郎	山田 雄治	長谷部 一裕
鈴木 正二	竹石 松次	古泉 幸代	大森 ゆかり	高橋 慶三	阿部 昭一	渡邊 信也	丸山 美由紀
井浦 康晴	宇野 勝雄	赤塚 義廣	坂井 俊一	鈴木 伸作	佐藤 銀治郎	加藤 寿一	石附 由美子
齋藤 博文	齋藤 幸広	田辺 俊文	小田 静二	渡邊 徹	中村 好彦	栗田 浩	栗田 朋子
阿部 文仁	高尾 茂典	五十嵐 豊	久代 勝英	古泉 幸一	加藤 純子	松島 謙介	高倉 広利
清水 泰成	中野 節子	宮口 澄子					

食の新潟応援団(賛助会)募集中!

食を通じて飢餓や貧困などに苦しむ世界の現状に目を向けると、日本にいる私たちにも食の危機が及びつつあり、世界の人々の命が一つにつながっていることがわかります。

食と私たちの命を守る本財団の事業に賛同し応援してくださる皆様を募集しています。

詳しくはホームページをご覧ください。ホームページ <http://www.niigata-award.jp/>